

論文

中島敦「文字禍」の年代設定過程解明

Addressing the Date and Setting of Nakajima Atsushi's *Mojika*

キーワード：中島敦，「文字禍」，伝奇的リアリズム，アッシュルバニパル，アッシリア

**Key Words:** *Nakajima Atsushi*, *Mojika (The Woes of Letters)*, *Romantic Realism*,  
*Ashurbanipal*, *Assyria*

三津間 康幸 MITSUMA, Yasuyuki

筑波大学人文社会系助教

Abstract\*

In 1942, the Japanese novelist Nakajima Atsushi published a short story titled *Mojika (The Woes of Letters)*. The story is set in Nineveh, the capital city of the Assyrian Empire, immediately following the end of the revolt of Šamaš-šumu-ukīn, the brother of King Ashurbanipal. At the king's command, the scholar Nabû-aḥḥē-erība, who is also the protagonist of the story, seeks to better understand the art of writing letters and makes claims about their accursed and nonsensical nature. The protagonist's claim hurts Ashurbanipal, one of the most sophisticated rulers in the ancient world, and he responds bitterly. King Ashurbanipal orders Nabû-aḥḥē-erība to be confined to his home. For his revelations, Nabû-aḥḥē-erība inevitably dies by the retaliation from the letters.

In this article, I first review recent studies and show the process behind *Mojika*'s formation: from English and German classical (introductory) books of Ancient Near Eastern history to Nakajima's own notebooks and finally the story itself. Second, I explain why the story is dated to the twentieth year of Ashurbanipal's reign (the end of Šamaš-šumu-ukīn's revolt is generally dated to the twenty-first year of Ashurbanipal's reign today). Some lines of Nakajima's "Notebook Six" reveal that he understood the first year of Ashurbanipal's reign as 667 BC (generally dated to 668 BC today) on the basis of the captions in the maps 2-3 of A. T. Olmstead's *History of Assyria* (drawn by George C. Hewes, Jr.)\*\* and that the revolt ended in 648 BC (this dating is generally accepted even today). This led Nakajima to date the end of the revolt in the twentieth year of Ashurbanipal's reign, resulting in the one-year gap against the generally accepted date of the twenty-first year of his reign.

---

\* I thank Gina Konstantopoulos (University of Tsukuba) and Editage ([www.editage.jp](http://www.editage.jp)) for the revision of my English.

\*\* I thank Miriam Hewes Slejko and Elaine Schaufele for their help in identifying the illustrator of the maps.

I. はじめに<sup>1</sup>

作家中島敦<sup>2</sup>は1941年7月、当時日本統治下にあったパラオに、教科書編纂に携わる南洋庁の国語編修書記として赴任した（高橋他 2002: 504 [鷺只雄作成「中島敦年譜」]；川村 2009: 339-340）。その出発に先立つ6月、彼は鎌倉在住の作家深田久彌に、4編の小説をふくむ「古譚」という作品を預けた（高橋他 2002: 504; 深田 2002: 183-185; 川村 2009: 339）。この4編は中島（1942b: 1-47）にまとめて発表されるが、そのうち2編が先行して、やはり「古譚」の表題のもと『文學界』1942年2月号に掲載された。その一編が有名な「山月記」である（中島 1942a: 138-144; 中島 2001: 22-29）。

この「山月記」とともに『文學界』に掲載されたもう一編が、本稿で扱う「文字禍」である（中島 1942a: 144-151）。「文字禍」はアッシュルバニパル王の時代のアッシリアの都ニネヴェを舞台にした以下のような短編である。ニネヴェの図書館の闇の中で毎夜、文字の霊らしきもの話し声が聞こえるとのうわさが立った。主人公たる学者ナブ・アヘ・エリバ<sup>3</sup>は王命を受けて文字の霊の研究を行い、楔形文字を構成する線の集合に一定の音と意味を持たせる文字の霊の存在を認めるに至る。そして歴史家イシュデイ・ナブとの「歴史とは何ぞや？」という問題をめぐる対話では知らず知らずのうちに物事に不滅の生命を与える文字の霊の威力を賛美してしまう。最終的にナブ・アヘ・エリバは文字の弊害を王に訴え出るが、文化人たる王アッシュルバニパルはこれに機嫌を損ね、ナブ・アヘ・エリバは謹慎を命じられ、ついには文字の霊の復讐によって落命する<sup>4</sup>。

<sup>1</sup> 本稿での「文字禍」本文の引用は中島（2001: 30-38）による。ただし旧漢字は新漢字に改めるほか、一部の表記も改める。中島（2001: 30）ではタイトル「文字禍」の「禍」も旧漢字の「禍」となっているが、本稿では新漢字を使用する。「文字禍」創作資料はいずれも中島（2002）から引用し、神奈川文学振興会（2009）と照合して修正を加えるが、旧漢字は新漢字に改め表示する。

本稿中で、ユリウス暦のある年（n年）の途中から始まる（春に新年を迎える）メソポタミア標準暦の各年のことを西暦で表記する場合には、（西暦紀元）前 n/n - 1 年の表記を用い、標準暦の各月はローマ数字で示す。メソポタミア標準暦については Cohen（1993: 297-305）参照。

<sup>2</sup> 中島敦（1909-1942）。東京生れ。1933年、東京帝国大学文学部国文学科卒業。横浜高等女学校教諭となる。1934年、「虎狩」が『中央公論』の新人募集懸賞小説で選外佳作。1941年、南洋庁内務部地方課国語編修書記としてパラオに赴任。1942年、「光と風と夢」で芥川賞候補（以上、川村 2009: 335-341 の「中島敦年譜」による）。同年、南洋庁を退職し、創作に専念するも（川村 2009: 264）、同年12月に持病の喘息が悪化して死去した（川村 2009: 332）。「山月記」「李陵」「弟子」などが戦後の高校生用国語教科書に広く採用されている（川村 2009: 8-10）。1940年頃から古代アッシリア史などを学習し（中島 2003: 216-218 の編集部作成「年譜」による）、それは1942年発表の「古譚」に結実した。

<sup>3</sup> モデルは実在の天文占星学者ナブ・アヘ・エリバであり、彼は西暦紀元前 677 年から前 666 年の間に活動が確認され、最古のオーロラ様現象記録と同定されたアッシリア占星術レポート 3 点のうちの 1 つを書いている（Hayakawa et al. 2019: 2-3, 6: Tablet R2）。

<sup>4</sup> 「文字禍」については小林（2015: 153-155）に紹介がある。また円城（2018）のように、オマージュと考えられる作品も存在する。

佐々木 (1975: 182) は「文字禍」とともに「古譚」の一編をなし、ペルシア帝国のエジプト征服 (西暦紀元前 525 年) を背景とする「木乃伊」(中島 2001: 16-21) について、「古代オリエント」(すなわち西アジア・北アフリカ) という時空間やそれに属する事物 (この場合はミイラ) の表象が、読者を現実と非現実のあわいに立たせる中島の「伝奇的リアリズム」の装置として機能したことを指摘する。この「伝奇的リアリズム」は「古譚」4編を貫くものであり (佐々木 1973: 119-120; 洪 2009: 196)、「狐憑」(ホメロスに先立ってスキタイの一部族に現れた詩人の物語, 中島 2001: 9-15) や「木乃伊」, 「文字禍」においては古代西アジアやその周辺地域のリアリティを持った描写とそれを可能にする資料調査に支えられてはじめて成り立つものであろう。「狐憑」や「木乃伊」についてはヘロドトス『歴史』の英訳が資料として利用されたことが明らかにされている (木村 1980: 67-69; 新井 2004: 118-123; 新井 2005: 136-140)。また「文字禍」についても中島は資料調査を綿密に行っている。「文字禍」には前 7 世紀頃のアッシリアの政治や文化が細かに描写され、読者が古代のニネヴェにおける文字の霊の怪異という虚構にリアリティを感じるよう促す。このような描写がいかんして可能となり、あるいはいかなる資料からアッシリアに関する情報が得られたのかについては、木村 (1980) 以来研究が進み、創作資料も積極的に参照されている。木村 (1980: 69-70) は中島の描写の一部が Olmstead (1923) に基づくことを「文字禍」の草稿「文字」や「ノート第三」「ノート第六」「昭和一六年手帖」といった創作資料へとさかのぼりながら指摘し、安福 (2001) も創作資料を活用して「文字禍」の複雑な成立過程を明らかにする中で、Jastrow (1915) も資料として用いられたことを指摘した。また山本 (2015: 149-154) は Myers (1904) を資料として指摘した。山下 (2017) はこの 3 冊に加え、Breasted (1916) あるいは Breasted (1919) をも資料として指摘し (うち前者の方を中島が参照した可能性が高いとする)<sup>5</sup>、「文字禍」本文に注釈を加えるかたちで、創作資料を参照しながらアッシリア関連の叙述が英書のどの個所に基づくのか明らかにした。

このようにして中島の資料調査と活用の実体が解明されてきたことを踏まえ、筆者は本稿第 II 章で「文字禍」の成立過程とその資料について整理する。さらに第 III 章では、「文字禍」のリアリティを支える叙述が複数の資料の検討を経て練り上げられていった、その一端を「文字禍」の年代設定の成立過程を解明することで例示したい。「文字禍」の年代は、アッシュルバニパルの兄弟でその下でバビロニア王であったシャマシュ・シュム・ウキンの反乱がバビロン落城で終息した直後、かつアッシュルバニパルの治世第 20 年に設定されていることが冒頭近くの記述から明らかである。そしてこれはバビロン落城を同王治世第 21 年に位置づける現在の古代西アジア史研究における理解<sup>6</sup> とはずれを見せている。この年代設定のずれは本作の現実との接続を支える叙述としては疑問が感じられる要素である。そこで本稿ではこのような中島の年代設定が——21 と 20 との比較からは前者の端数

<sup>5</sup> この指摘については山下 (2017: (14)) を参照。

<sup>6</sup> 例えば Novotny and Jeffers (2018: 27-32) を参照。

を単に切り捨てた結果のように憶測されるかもしれないが——決してそのような不用意な数字操作などによって生じたものではなく、あくまで資料に基づきながら行われていることを明らかにする。具体的には、中島が反乱終息を前 648 年、アッシュルバニパルの即位を、現在の研究における前 669 年との理解（例えば Parpola 1983: 382 を参照）に反して、前 668 年として年代を計算していることを指摘し、特に計算の起点（いわばゼロ年）となる後者の年代は、先行研究（山下 2017: (15)）では典拠として指摘されていない Olmstead (1923: 46-47: maps 2-3) に基づくこと、中島の創作資料の中に上記のような年代計算を示唆する書込みが見られることを明らかにする。

## II. 「文字禍」の成立過程と資料

「文字禍」はその創作資料も公表されており、小説の叙述と資料の内容を成立過程に沿って並べ、比較すれば、中島の（アッシリア関連の）各叙述がどのように成立したかをある程度見通せる。次に安福 (2001: 204) がチャートの形で示した「文字禍」成立過程を多少改変し、中島 (2001) や中島 (2002) での個所も添えて示す<sup>7</sup>。また今後創作資料や小説本文に言及する際は、基本的に下記チャートの番号を用いる。

### ①英文資料

↓

①「ノート第六」の抜書集（中島 2002: 281-290）

↓

②「ノート下書」（中島 2002: 243-246）← ①

↓← ③「手帳：昭和十六年<sup>8</sup>」（中島 2002: 429-437）← ①<sup>9</sup>

④「文字」（中島 2002: 246-254）← ①②

↓← ⑤「ノート第三」の抜書集（中島 2002: 254-256）← ？

↓← ⑤'「ノート断片」（中島 2002: 290）

⑥「文字禍」（中島 2001: 30-38）← ①②④

このように① → ② → ④ → ⑥と、直線的に⑥「文字禍」の成立に至る過程があり、

<sup>7</sup> 安福は①や⑤' という番号は用いていない。①は単に「英文資料」とし、⑤' は⑤に含めている（安福 2001: 204）。

<sup>8</sup> 木村 (1980) における呼称は「昭和一六年手帖」。

<sup>9</sup> 手帳〈一月 13 ~ 19 日の頁〉の英文（中島 2002: 432）と①に属する Olmstead (1923: 387) との対応関係については安福のチャートに示されていないが、安福 (2001: 199) に指摘されている。

③は④「文字」(⑥の草稿)の成立段階で、⑤や⑤'は⑥の成立段階で参照されたとみられる。「ノート第六」「ノート第三」は文字通りの「ノート」すなわち帳面であり<sup>10</sup>、その中に含まれる参考資料からの抜書がそれぞれ①、⑤になる。②、⑤'は独立のノートではなく、前者は「ノート第三」に、後者は「ノート第六」に書かれている。また「ノート第三」は④も含んでいる。成立過程全体において注意すべきは、2つ以上前の段階の資料が②以降の成立の際に参照されていることである。①②について、最終的に⑥が成立する際まで参照され直されていることを考慮しなければならない(安福 2001: 204)。

①は⑥(英文資料)に基づく。すでに木村、安福、山下らが引用しているが(木村 1980: 69; 安福 2001: 193-194; 山下 2017: (13)-(14))、③の<一月1~5日の頁>から<一月6~12日の頁>に英文文献リストが存在する(中島 2002: 432)。山下(2017: (14))も注意するように、このリストにある文献全てが中島によって購入され参照されたかは不明である。また中島の旧蔵書目録(日本大学法学部図書館 1980; 田鍋 1986)からもリストにある書籍の所蔵は確認できないが、その背景には、生前古書店に売却された蔵書、また1947年の水害によって破損、棄却された蔵書が多数あるという事情があろう(田鍋 1986: 276)。

既述のように、木村(1980)と安福(2001)が資料としての利用を確認した英文文献(⑥)は上記リストにあるもののうち Olmstead (1923) および Jastrow (1915) であるが、その後、Myers (1904) と、リストにある Breasted (1916) あるいは Breasted (1919) の利用も指摘された。これら3つの文献は⑥に含めて扱う。Myers (1904) はリストにないが、中島の旧蔵書目録から所蔵が確認される(日本大学法学部図書館 1980: 19; 田鍋 1986: 283)。山下(2017: (16))によれば、Myers (1904) と⑥が対応するとみられるのは1か所(「千に余るバビロンの俘囚は悉く舌を抜いて殺され、その舌を集めた所、小さな築山が出来た」)である(山本 2015: 149-152 も参照)。また Breasted (1916) および Breasted (1919) のうち、中島が参照した可能性が高いと山下が考える前者と⑥とは2か所(「其の後二百年にして地下に埋没し、更に後二千三百年にして偶然発掘される」、「古代スメリヤ人が馬といふ獣を知らなんだ」)が対応する(山下 2017: (17), (24))。このうち、「千に余るバビロンの...」については⑤'や④に、「其の後二百年に...」についても④に対応する記述があるので、Myers (1904) や Breasted (1916) は遅くとも④成立時までには参照されたと考えられる<sup>11</sup>。

⑤のもとになった資料は今のところ不明である。安福によれば少なくとも2種類の文献で構成され、独文資料が含まれる(安福 2001: 206)。確かに⑤のうち37丁裏から35丁裏にかけて(中島 2002: 254-255)<sup>12</sup>、アッシリアやバビロニアの王名が多数列記され、安福が指摘する Sohn, des といったドイツ語の単語が混じるほか、人名のs音がschと表記さ

<sup>10</sup> これらのノートの形態については、中島(2002: 678-680 [鷺只雄「解題」])参照。

<sup>11</sup> より早い段階で参照されていた可能性もあり、それを論証するためには①や②とこれらの資料との精密な比較が必要になるが、今回この作業は紙幅の都合で行えなかった。

<sup>12</sup> 「ノート第三」の37丁裏から34丁表までは後ろから使われている(中島 2002: 679)。



れる例も散見され、独文資料からの抜書を示唆する。中島の旧蔵書目録の中で目に付く独語文献としては

Weltgeschichte 2～4 (3 vols.)

E. Täger

Velhagen, Klasing u. Schroedel

1909～1912

がある（日本大学法学部図書館 1980: 19）。同じ文献は田鍋（1986: 286）にも採録されるが、いずれでも著者名は誤記され、正しくは O. Jäger であることが、2006 年に日本大学法学部から中島の旧蔵書を「中島敦文庫」に移管された<sup>13</sup> 県立神奈川近代文学館の蔵書検索（検索語は Weltgeschichte）から判明する<sup>14</sup>。この 4 巻本の Weltgeschichte のうち、アッシリア史などを扱う第 1 巻（Jäger 1909）は旧蔵書に見えないが、他の 3 巻は中島敦文庫に現存するので<sup>15</sup>、この巻もかつて中島が所有し、後に売却あるいは棄却された可能性がある。しかし、⑤に表記された人名のうち、本稿の考察に関係するもの（Asur-ach-iddin; Asur-banapal; Samas-schūm-ukin; 36 丁裏に表記）はそれぞれ、Jäger (1909: 50-54) において Assarhaddon / Assur=achid=idin; Assur=banhabal / Assurbanipal; Samassumukin と書かれており、いずれも表記が一致しない。このようなことから、Jäger (1909) が⑤成立の際に参照された可能性は低いといえる。

次章では上記のような「文字禍」成立過程をさかのぼるかたちで、その現実との接続を支えるものとしては疑問が感じられる要素である、⑥の冒頭に近い部分に示される年代設定について、それがどのような資料をどのように活用して成立したのかを明らかにする。

### III. 「文字禍」の年代設定

#### III.1. 「文字禍」(⑥)における年代設定

「文字禍」の最終的な年代設定は⑥の冒頭近くの部分に、以下のように示される。

其の頃——といふのは、アシュル・バニ・アパル大王の治世第二十年目の頃だが——

ニネゴの宮廷に妙な噂があつた。毎夜、図書館の闇の中で、ひそひそと怪しい話し声

<sup>13</sup> 「生誕 100 年記念 中島敦展：ツシタラの夢」県立神奈川近代文学館，<https://www.kanabun.or.jp/exhibition/2446/>（2020 年 4 月 20 日最終閲覧）

<sup>14</sup> 「蔵書検索」県立神奈川近代文学館，<https://www.kanabun.or.jp/cgi-bin/nph-mgw.cgi?MGWLPN=CARIN&wlap=CARIN&WEBOPAC=1&OPACGID=2>（2020 年 4 月 20 日最終閲覧）

<sup>15</sup> 同文庫への所属も前記検索から判明する。

がするといふ。王兄シャマシュ・シュム・ウキンの謀叛がバビロンの落城で漸く鎮まつたばかりのこととて、何か又、不逞の徒の陰謀ではないかと探つて見たが、それらしい様子もない（中島 2001: 30）。

王名「アッシュル・バニ・アパル」は、現代の文献では「アッシュルバニパル」のように表記される<sup>16</sup>。「ニネゴ」は当時のアッシリア帝国の都で、これも現代では「ニネヴェ」と表記される<sup>17</sup>。ここでは「文字禍」で語られる出来事の年代が「アッシュル・バニ・アパル大王の治世第二十年目の頃」とされ、さらにこの頃「王兄シャマシュ・シュム・ウキンの謀叛がバビロンの落城で漸く鎮まつたばかり」であったとされる。「治世第二十年目」は治世第 20 年の一時点を指す表現で、単なる「治世第二十年」と意味はあまり変わらないと考えられる。「頃」という表現は年代設定をあいまいにしているようにも感じられるが、「第二十年」という数字は確かであるし、すぐ後に「バビロンの落城で漸く鎮まつたばかり」とあるから、出来事の年代はアッシュルバニパル治世第 20 年、「バビロンの落城」直後のことと考えて差し支えない。

アッシリアでは年名を各年のエポニム（リンム）職に就く人物の名で表し<sup>18</sup>、アッシュルバニパルに対するシャマシュ・シュム・ウキンの反乱がバビロン落城で終息した年は「ヒンダーヌの知事ベールシュヌのリンム（年）」となる<sup>19</sup>。問題なのは、アッシリアではユリウス暦前 648 年 4 月 7 日の日没時に始まるこのメソポタミア標準暦の年<sup>20</sup>、すなわち前 648/647 年<sup>21</sup>、アッシュルバニパルの治世第 20 年ではなく第 21 年に相当することである。この 1 年のずれ、あるいはアッシュルバニパル治世第 20 年にシャマシュ・シュム・ウキンの反乱が終息したとの認識がいかに生じたのかを、以下で「文字禍」の創作資料をさかのぼりつつ考察する。

### III.2. 「ノート第三」の抜書集 (⑤) における年代認識

まず④ → ⑥の成立の際に用いられた⑤（不明資料からの抜書集）の 36 丁裏から 36 丁表にかけ、アッシュルバニパルの祖父センナケリブの死からシャマシュ・シュム・ウキンの反乱終結前後までの経緯が、簡単に記される（中島 2002: 255）。記載が複雑なため、写

<sup>16</sup> 例えば、渡辺 (2004) を参照。

<sup>17</sup> 例えば、小口 (2004) を参照。

<sup>18</sup> 例えば、川崎 (2004) を参照。

<sup>19</sup> このリンムについては、Parpola (1983: 384); Millard and Whiting (1994: 91-92); Novotny and Jeffers (2018: 30-32) 参照。またこのリンム（年）の用例は、SAA 10 141 r. 4-5 参照。

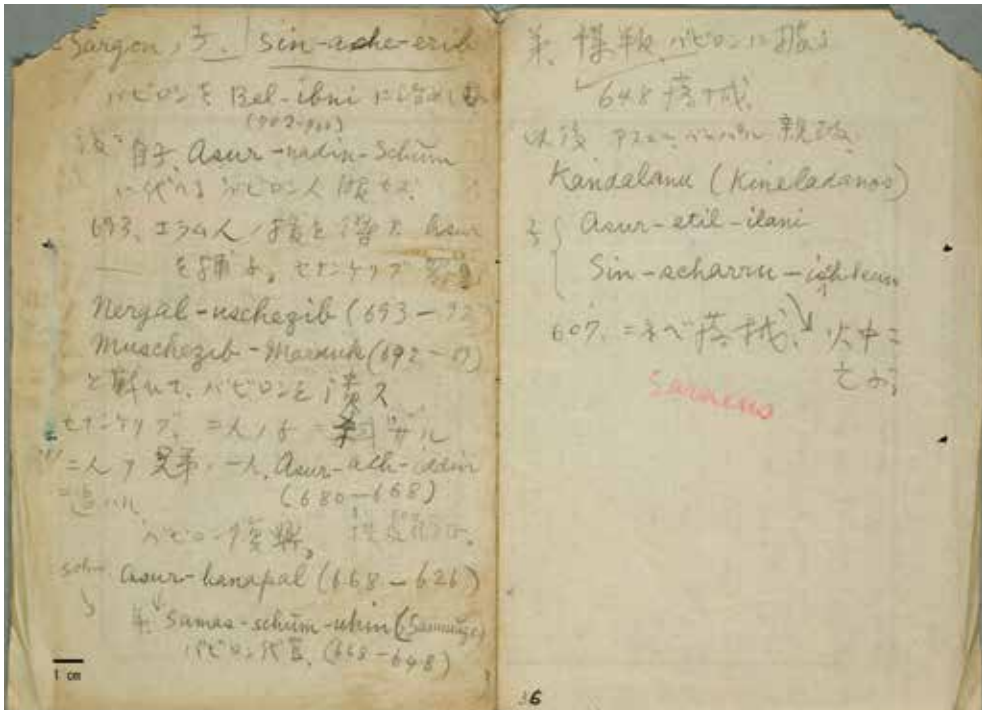
<sup>20</sup> アッシュルバニパル即位年から治世第 21 年までの各月 1 日（の日没から夜半まで）とユリウス暦の日付との対照は、Parpola (1983: 382-383); Novotny and Jeffers (2018: 28) を参照。

<sup>21</sup> 前 648/647 年にバビロンが陥落し、シャマシュ・シュム・ウキンの反乱が終息したことは Frame (1992: 153-155); Novotny and Jeffers (2018: 32) を参照。

真を図1に示したうえで以下に引用する。

図1: 中島敦「ノート第三」36丁裏(左)および36丁表(右)(県立神奈川近代文学館所蔵)

セナンケリブ、二人ノ子ニ弑サル  
ソノ二人ヲ兄弟ノ一人、Asur-ach-iddin



ニ追ハル、 (680—668)

| 670

バビロン復興。 埃及遠征。

Sohn. Asur-banapal (668—626)

ノ弟、<sup>1</sup>Samas-schüm-ukin (Sammüges)

バビロン代官、(668—648)

弟、謀叛、バビロンに拠る

ノ 648 落城、

以後、アスウル、バニパル親政

Kandalanu (Kineladanos)



Asur-ach-iddin はアッシュルバニパルやシャマシュ・シュム・ウキンの父エサルハドン、Asur-banapal や「アシュル、バニパル」はアッシュルバニパル、Samas-schüm-ukin (Sammüges) はシャマシュ・シュム・ウキンのことである。Kandalanu (Kineladanos) はシャマシュ・シュム・ウキンの後、アッシュルバニパルがバビロニアの統治者とした王カンダラーヌのことである<sup>22</sup>。Sammüges, Kineladanos の表記はギリシア語史料やその翻訳でのシャマシュ・シュム・ウキン、カンダラーヌの表記に由来する。Sammuges はエウセビオス『年代誌』のアルメニア語訳中に表記された名をラテン文字で転写したものであり、Eusebius (1818: 44) にアルメニア文字表記と並んで見える。Kineladanos はプトレマイオスの「王名表」に見える属格形のギリシア文字表記 (Grayson 1980-1983: 101) を主格形に直してラテン文字で転写したものである<sup>23</sup>。

現在理解されているところでは、前 669/668 年にアッシリア王 (兼バビロニア王) エサルハドンが死去し、同年のうちにアッシリアではアッシュルバニパルが即位したが、バビロニア王シャマシュ・シュム・ウキンの即位は前 668/667 年のことであった。エサルハドンが治世第 12 年 VIII 月 10 日 (この VIII 月はアッシリアではユリウス暦前 669 年 10 月 23 日の日没に始まり 11 月 22 日の日没に終わる) にエジプトへの途上で死去したことは<sup>24</sup>、バビロニア年代誌 ABC 1 iv 30-31; ABC 14 28-29 に記述される。ABC 14 34 によれば、アッシュルバニパルがその直後、前 669/668 年 IX 月 (前 669 年 11 月 22 日の日没に始まり 12 月 21 日の日没に終わる)<sup>25</sup> に、アッシリアで即位した。この後前 669/668 年末までが彼の即位年であり、治世第 1 年は翌前 668/667 年となる。一方 ABC 1 iv 34-36; ABC 14 35-36 にはシャマシュ・シュム・ウキン即位年 II 月にマルドゥク神などがアッシュルからバビロンに帰還した事が記され、この「即位年」はエサルハドンの死去の年である前 669/668 年の残りをカバーするものではなく (その場合即位年 II 月は存在しない)、翌前 668/667 年に相当する。シャマシュ・シュム・ウキンの治世第 1 年は前 667/666 年である (例えば Frame 1992: 267 参照)。

⑤から読取れる年代情報はこれと異なりエサルハドンの死、アッシュルバニパル、シャマシュ・シュム・ウキンの王即位は何れも前 668 年となる (同一西暦年における王交代の表示が、メソポタミア標準暦新年の新王治世第 1 年の始まりを王交代時期として示す可能性もあるが、これはひとまず措く)。中島が (年途中の) 王即位の翌年が治世第 1 年となるという、当時のアッシリアやバビロニアの慣習をある程度理解していたとすれば、彼

<sup>22</sup> このことについては、Frame (1992: 191-192) 参照。

<sup>23</sup> これは中島が⑤を作成する際に『年代誌』アルメニア語訳や「王名表」を直接参照したというよりは、彼がその際に参照した資料 (群) にそれらに由来する表記が含まれることを意味するのであろうが、本稿第 II 章で述べたようにこの資料 (群) の詳細は今のところ不明である。

<sup>24</sup> アッシリアにおけるエサルハドン治世第 12 年の各月 1 日とユリウス暦の日付との対照は、Parpola (1983: 382) 参照。表の見方は、Novotny and Jeffers (2018: 28) 参照。

<sup>25</sup> Parpola (1983: 382); Novotny and Jeffers (2018: 28) 参照。

は前 667 年をアッシュルバニパルの治世第 1 年ととらえたことになる<sup>26</sup>。中島はまた⑤で「バビロン」について「648 落城」としており、前 667 年をアッシュルバニパルの治世第 1 年とすれば、前 648 年（バビロン落城の年）は、⑥に書かれているように、同王の治世第 20 年となる。そしてこの数字を導くためには、治世第 1 年たる前 667 年を起点とするより、前 668 年をいわばゼロ年ととらえて、 $668 - 648 = 20$  と計算するのが容易である。上記のような年代認識は⑤や⑥においてではなく、より前の段階で成立していたものと思われる。そのことを確認するため、続いて④を検討する。

### III.3. 「文字」(④) における年代設定

④の冒頭、9 丁表には次のように書かれる（中島 2002: 246）。次の引用ともども、網掛けは後から消された部分、□ に入っているのは行間に示された挿入部分である。

アッシリアのルキ十四世ともいふべきアシュル・バニ・アパル大王の治世第二十年〔目〕の初夏の或日、ニネヴェの王立大図書館の広間に、〔偶々〕三人の聞えた大博士が落合うつた。

「文字」はほぼこの三博士の会合を舞台にして語られ、11 丁裏には次のような記述がある（中島 2002: 247）。

現大王の兄に当る〔バビロン王〕シャマシュ・シュム・ウキンが、十七年の隠忍の後、弟たるアッシリア王に対して、未だかつてこの国に例の無かつた大規模の叛乱を起した。西南亜細亜は二分して、各々〔その〕いづれかに味方し、〔まる〕三年間烈しく争つた末、〔最近〕漸くバビロンの落城によつて、けりがついたのである。

2つの記述から、中島がすでに④の段階でアッシュルバニパル治世第 20 年（の初夏、あるいはその少し前）のバビロン落城直後に物語を位置付けていたと判明する。ここにも「〔最近〕漸くバビロンの落城」という表現があるので、落城は同年初夏の三博士の会合からあまり前のこととは思われない。この年代設定の根拠を探るため、続いて①とその資料を検

<sup>26</sup> 中島が春新年のメソポタミア標準暦に厳密にしたがって年代を計算したかどうかは疑問である。以下に見る中島の計算の典拠や証拠は多くが「西暦紀元前 n 年」という単位での表示に留まるからである。それゆえ本稿で彼の年代計算を復元するにあたっては、彼が西暦（ユリウス暦）にしたがって計算していたものと仮定する。

証する。

III.4. 「ノート第六」の抜書集 (①) における年代計算とその資料

「ノート第六」はほとんどの部分が後ろから使われ (中島 2002: 680), 42 丁表には,

669. Esarhaddon 埃及への途上に  
十一月 死す  
Ashur-bani-apal 即位,

という抜書がある (中島 2002: 283)。この抜書のもとになった記述は, 山下 (2017: (15)) が指摘するように Olmstead (1923: 399) にある。英文は, エサルハドンが前 669 年 11 月にエジプトへの途上で死去したと示し, 続いてアッシュルバニパルの即位を記す。この英文は Chapter XXX に属し, エサルハドン死去については同王が治世第 12 年 VIII 月 10 日 (アッシリアでは前 669 年 11 月 1 日の日没に始まり 11 月 2 日の日没に終わる日) に死去したという, 年代誌 ABC 1 iv 30-31 の記述に直接, あるいは間接に依拠したものと考えられるが, Olmstead (1923: 399) には典拠は明示されない<sup>27</sup>。

また①の 32 丁裏 (中島 2002: 286) に至り, 次に示す抜書が現れる (下線は原文のママ)。

648 七月半。子供の肉を喰ふに至る。  
馬具の革を噛む,  
Shamash-shum-ukin 火に入つて死す。  
葬礼は占星家。Mar Ishtar 行ふ。  
に託して。  
Babylon 市民虐殺。  
    ↘ Ashur につれ去られ  
王の前で舌を切断さる。  
餓死体、満市疫病。  
狼、野猪、秃鷹、野犬、

この「648 七月半」前後のシャマシュ・シュム・ウキン死去およびバビロン落城についての中島の抜書のもとになった英文は, Olmstead (1923: 475) にあって, これは

<sup>27</sup> ABC 1 が 1887 年にすでに公刊されていたことは, ABC : 70 の文献表を参照。一方, この事件についてのもう一つの史料である ABC 14 が初めて公刊されたのは 1924 年のことであり (ABC : 125), Olmstead (1923) の典拠とはならない。

ChapterXXXVIに属す<sup>28</sup>。この間に、抜書には反映されていないが、シャマシュ・シュム・ウキンの公式な治世第1年が前668年3月に始まるとの記述を、ChapterXXXI(Olmstead 1923: 406)に見出せる。その前後にある、マルドゥク神のバビロン帰還に関する記述(Olmstead 1923: 405-406)を中島が①40丁裏に抜書しているので(中島 2002: 284),彼がシャマシュ・シュム・ウキン治世第1年を前王死去の翌年とする記述を見たことは確実である。そして彼がこのギャップをアッシュルバニパルの場合にも適用し、その公式な治世第1年をエサルハドン死去の翌年と考えた可能性は十分にある<sup>29</sup>。

ただし、ここまで①から引用した抜書やその資料となったOlmstead (1923)の記述はエサルハドン死去(およびそれに続くアッシュルバニパル即位)を前669年11月、バビロン落城を前648年の7月半ば前後のこととしている。アッシュルバニパル治世第1年を前王死去の翌年、前668年として計算すると、バビロン落城の年(前648年)はアッシュルバニパル治世第21年となって、これは現時点から見ると史実に適合するが、④や⑥の記述とは齟齬が生じる。しかし、山下(2017: (15))には指摘されていないものの、Olmstead (1923)や①にはエサルハドン死去およびアッシュルバニパル即位を前668年とする様な部分があり、中島の年代計算はこの年を起点(ゼロ年)とし、翌前667年をアッシュルバニパルの治世第1年として行われたと考えられる。

①は表1に示すようなアッシリア王一覧表を含み(中島 2002: 289),そこからエサルハドン死去、アッシュルバニパル即位の年代が共に前668年と読取れる。この部分は「ノート第六」の使い方が不規則になっているので(中島 2002: 680),丁数を示しながら提示する。さらに、この一覧表の情報はOlmstead (1923)に由来すると考えられるので、表1では中島が典拠にしたと思われる同書の記載を左側に、中島が作成した一覧表の記載を右側に提示する。特に主要な典拠と考えられるのは、Olmstead (1923: 46-47: maps 2-3)に見開きで提示される、アッシリア帝国の発展を示す8つの小地図である(George C. Hewes, Jr. 作成)。各小地図の見出しはアッシュル・ウバリト1世(ASHUR-UBALLIT)からアッシュルバニパル(ASHUR-BANI-APAL)に至る主要な王(7番目と8番目の小地図には各2名)の名前(全て大文字)と彼らの統治期間(一部については統治期間の末年)を組み合わせて示している。この見出しの記載は特に頁を示さずに引用する。この小地図に現れない王の名前と統治期間も、Olmstead (1923)本文中に組み合わせて記された個所が見出だされる(この場合、王名はそれ自体の頭文字および、構成素となる神名の頭文字以外は小文字で記さ

<sup>28</sup> 中島が④の三博士の会合の季節を「初夏」としたことは、このシャマシュ・シュム・ウキン死去およびバビロン落城の時期を念頭に、会合を同じ前648年の7月中に位置づけたことを意味するかもしれない。中島と同時代人の萩原朔太郎(1886-1942)は随筆「石段上りの街」(1919)で「晩春四五月から、初夏の六七月」という季節感覚を述べる(萩原 1976: 258)。

<sup>29</sup> ただし注26でも述べたように、中島がこのような判断をしたとしても、中島の考える「翌年」は春新年のメソポタミア標準暦ではなく、ユリウス暦(西暦)によるそれであった可能性が高い。

れる)。この場合は当該の記載を、記載がある頁も示しながら引用する。

|   |   |
|---|---|
| Olmstead (1923) の記載   | 中島の一覧表  |
| ASHUR-UBALLIT (1340)<br>cf. Ashur-uballit (1370-1340) (p.43)              | Ashur-Uballit (1340)  |
| TUKULTI URTA I (1232)<br>cf. Tukulti Urta (1260-1232) (p.52)              | Tukulti-Urta I (1232)   |
| TIGLATH PILESER I (1100) <sup>30</sup>                                    | Tiglath Pileser (1100)  |
| ASHUR-NASIR-APAL (885-860)  | Ashur-Nasir-apal (885-860)  |
| SHALMANESER III (860-825)<br>the fifth Shamshi Adad (825-812) (p.75)      | Shalmaneser III (860-825)<br>Shamshi Adad V (825-812)             |
|   | <ここまで 23 丁裏>  |
| the third Adad-nirari (812-782) (p.75)                                    | Adad-Nirari (その初めは母の<br>(812-782) Sammuramat が治める)<br>(Semiramis) |
| the fourth Shalmaneser (782-772) (p.75)                                   | Shalmaneser IV (782-772)  |
| Ashur-dan III (772-754) (p.75)<br>Ashur-dan III (772-755) (p.169)         | Ashur-Dan III (772-755)   |
| Ashur-nirari V (754-746) (p.75)<br>Ashur-nirari's reign (755-746) (p.172) | Ashur-Nirari V (755-746)  |
|   | <ここまで 24 丁表>  |
| TIGLATH PILESER III (746-728)   | Kalhu の長、<br>Tiglath Pileser III (746-728) 篡奪                     |
| Shalmaneser ... the fifth ... (728-722) (p.204)                           | Shalmaneser V (728-722)   |
| SARGON (722-705)  | Sargon (722-705)  |
| SENNACHERIB (705-681)   | Sennacherib (705-681)   |
| ESARHADDON (681-668)  | Esarhaddon (681-668)  |
| ASHUR-BANI-APAL (668-626)   | Ashur-bani-apal (668-626)   |
|   | <ここまで 23 丁裏>  |

表 1: 中島のアッシリア王一覧表と Olmstead (1923) の対応箇所

Olmstead (1923: 46-47: maps 2-3) の各小地図見出しに示される王名および統治期間（表 1 で王名が全て大文字になっているものに相当）と中島の一覧表のそれを比較してみると、王名（およびその構成素の一部）の頭文字以外の文字が小文字に直されていることを除

<sup>30</sup> Olmstead (1923) はティグラート・ピレセル 1 世の統治期間を明確に示さないが、Olmstead (1923: 61) はその前任者 Ashur-resh-ishi I の統治期間を“(1127-1115)”と、Olmstead (1923: 70) は次代の王 Saggal-apal-ekur II の統治期間を“(1102-1092)”としているので、1100 はティグラート・ピレセル 1 世の統治期間の（おおよその）末年を示していると考えられる。

くと、後者における変更点は Tukulti-Urta とハイフンが加えられていることと、TIGLATH PILESER I が Tiglath Pileser とされていることに限られる。そして両者はこれ以外では王名の表記や統治期間として示される数字がすべて一致しているので、対応関係は明白である。特に最初の二王については Olmstead (1923) の他の個所には統治期間の始めと末年が示されているにもかかわらず、小地図見出しに見える末年のみの表示が中島の一覧表に採用され、小地図見出しとの緊密な関係を示している。中島が小地図見出しを連続的に抜書したことは、「ノート第六」の 24 丁表および 23 丁裏の写真(図 2) でこのアッシリア王一覧

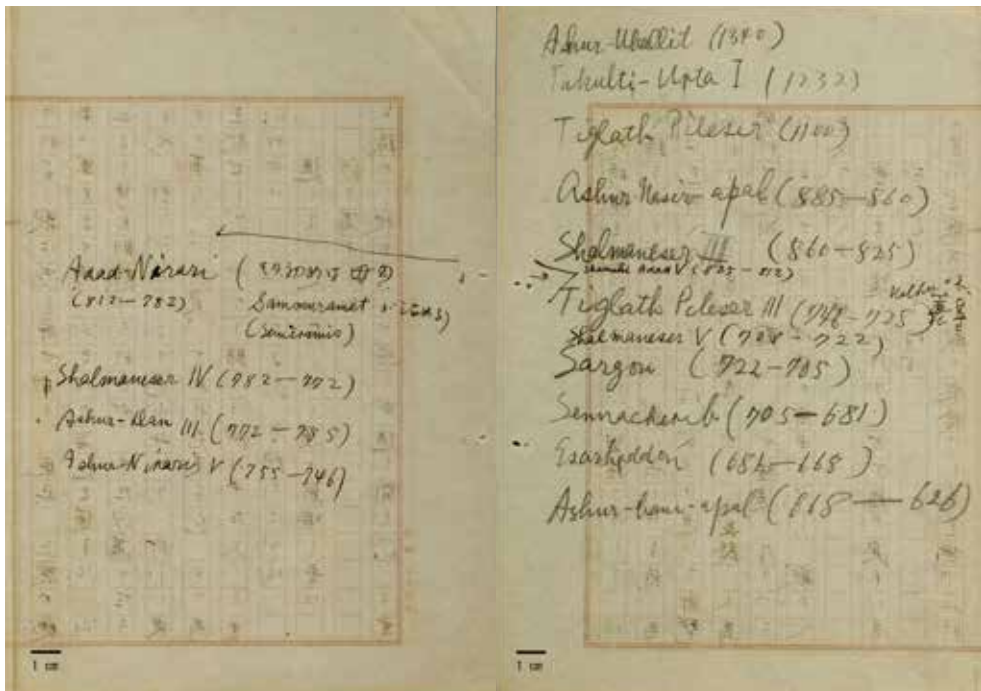


図 2: 中島敦「ノート第六」24 丁表(左) および 23 丁裏(右) (県立神奈川近代文学館所蔵)

表を参照することで明確になる。小地図見出しに対応する王名、統治期間(の末年)は全て 23 丁裏に鉛筆で書かれ、そこに見られない情報はインクを使って比較的小さな文字で 23 丁裏の行間や右余白に書き込まれたり、24 丁表にインクで書かれ、23 丁裏の Shamshi Adad V と Tiglath Pileser III の間への挿入が矢印で示されたりしている。つまり、中島はまず Olmstead (1923: 46-47: maps 2-3) の小地図見出しを全て鉛筆で書き出し、その後にインクで情報を補ったのである。そしてこの一覧表に小地図見出しをもとに Esarhaddon (エサルハドン) の末年(死去の年) および Ashur-bani-apal の統治期間の始まり(即位の年)として書いた前 668 年の翌年、前 667 年を後者の治世第 1 年と判断し(前 668 年はゼロ年ととらえ)、バビロン落城の年代は前 648 年と把握していたので、 $668 - 648 = 20$  という計算によって前 648 年をアッシュルバニパルの治世第 20 年として、④でそれに基づく年代設定をしたのであろう。実際、中島のアッシリア王一覧表にごく近く、やはり①に含まれ





図3: 中島敦「ノート第六」25丁裏  
(県立神奈川近代文学館所蔵)

る「ノート第六」25丁裏の右下には「68」「48」という数字が縦に並んでいるのを見ることが出来る(図3; Sin-shar-ishkunの右に「68」がある。これらの数字は中島[2002: 288]や、初取である中島[1976: 373]にも翻刻されていない)。まさにこれは中島の年代計算の起点となる時点を前668年、終点を前648年と示す計算の跡であろう<sup>31</sup>。①のこのような年代計算が④の記述のもとになり、その後彼が参照した⑤も、ある資料に基づきアッシュルバニパル即位を前668年、バビロン落城を前648年と示す様であり、中島の年代観は維持され、アッシュルバニパル治世第20年のバビロン落城直後という年代設定は⑥に受け継がれたのである。

#### IV. おわりに

本稿第II章では中島敦「文字禍」の複雑な成立過程と資料について整理し、第III章では「文字禍」の年代設定(アッシュルバニパル治世第20年、バビロン落城直後)を中島がどのようにして行ったのかを考察した。中島の「ノート第六」の抜書集(①)にはエサルハドン死去(及びアッシュルバニパル即位)を、現代の研究でも受け入れられている前669年とする記述の他、前668年という年代が読取れるアッシリア王一覧表があり、この年代はOlmstead(1923: 46-47: maps 2-3)に基づくことを明らかにした。さらに中島は前668年をアッシュルバニパルの治世計算の起点たるゼロ年とし、668から648を引くことにより、バビロン落城の年である前648年をアッシュルバニパルの治世第20年と計算したとみられる。今回その計算の跡と思われるものも①に同定できた。これに基づく上記の年代設定が「文字」(④)から「文字禍」(⑥)まで受け継がれるが、⑥成立の際に参照された「ノート第三」の抜書集(⑤)もある資料に基づきアッシュルバニパル即位を前668年と示す様であり、中島の年代認識を補強する役割を果たしたと思われる。

<sup>31</sup> 中島が西暦ではなく、春新年のメソポタミア標準暦にしたがって年代を計算したとすると、現代の研究書でよく見られるように(例えばFrame 1992: XXXIV参照)、この「(6)68」「(6)48」で前668/667年、前648/647年を表したことになる。バビロン落城の時期を前648年7月半ばとすれば前648/647年中のことになり、前668/667年をゼロ年とすれば、バビロン落城はやはりアッシュルバニパル治世第20年のこととなる。しかし、この仮説を論証するには関連資料の詳細な検討が必要であり、この作業は今後の課題としたい。

「文字禍」は戦前日本の作家が古代アッシリアを舞台に展開した稀有な作品であり、日本語で古代西アジアの政治や文化を題材にして創作された作品の初期の一例である。そのような創作の「伝奇的リアリズム」の現実との接続部分を支える叙述が単なる空想や偏見、あるいは不用意な数字の操作に基づくものではなく、複数の資料を参照して成り立っていることを、本稿では現代の古代西アジア史研究における理解とは若干のずれを見せ、それゆえ作品のリアリティと齟齬をきたすかに見えた「文字禍」の年代設定の成立過程を細かく検討することにより、改めて明らかにできた。今後も「文字禍」の成立過程の中でそのリアリティがどのようにして練り上げられたのかを、創作資料やそれが基づく文献との詳細な比較によって研究していきたい。特に喫緊の課題となるのは⑤の資料となった文献（群）の探索で、これにより「文字禍」成立過程の理解を完全に近づけたい。さらに将来的には、中島が古代西アジアを舞台とする作品を構想するに至った事情なども解明していきたい。

#### 注 31 への付記

また中島が前 648 (647) 年をアッシュルバニパルの治世第 20 年と判断した材料に（中島がこれと並行すると判断していたとみられる）シャマシュ・シュム・ウキンの治世年に関する情報がある。「ノート第六」33 丁裏にシャマシュ・シュム・ウキン治世第 20 年 5 月における飢えの状況が Olmstead (1923: 471) をもとに記され、その後 33 丁表にかけてのアッシュルバニパルとシャマシュ・シュム・ウキンの神々への祈りに関する抜書 (Olmstead 1923: 471-475 から) を挟み、32 丁裏の前 648 年 7 月半ばの記述へと続いている (中島 2002: 286) ことを付記しておく。

#### 謝辞

本研究の実施に当たっては JSPS 科研費 JP18H05445, JP18K00987 の助成を受けた。査読者の方々からは多くのご示唆を頂いた。県立神奈川近代文学館には図版の写真を貸し出して頂いた。また文献の参照に当たっては、上原妙子氏、廣永尚子氏（筑波大学西アジア文明研究センター）にご助力を頂いた。記して感謝したい。

#### 付論：カシーショーのアッシリア王一覧表

表 1 右欄および図 2 に示した中島の一覧表同様、Olmstead (1923: 46-47: maps 2-3) の小地図見出しをほぼ抜書したアッシリア王一覧表が、トルコのトゥール・アブディン出身のシリア正教徒で 1970 年にスウェーデンに移住したカシーショー (1918-2001; 経歴は Alkhas [2001] 参照) が「アッシリア人」としてアッシリア帝国の末裔たるアイデンティティを主張した「われらは歴史的、地理的、言語的、そして文化的にアッシリア人である」(Qashisho 2006) の中に「アッシリア帝国盛期の王たち」として挿入されている。出典は示されないが、表 1 左欄で王名を全て大文字で示した小地図見出しの引用部分と比較すれば

対応は明白である。Qashisho (2006) は *Hujâdâ* 誌のアーカイブで閲覧できる。同名の記事は *Hujâdâ* 1/1 (1978) から連載され (Makko 2017: 268, 289n22), 同じ一覧表が確認できる (1/1: 2)。 *Hujâdâ* 誌はスウェーデンのシリア正教徒におけるアッシリア民族主義の高まりを受け形成されたスウェーデン・アッシリア協会 (Assyriska Riksförbundet i Sverige, ARS) が発行し, 初代編集長はカシーヨーその人が務めた (Makko 2017: 267-268)。彼の一覧表を以下に 3 段組みで引用する (初出誌と照合済み)。彼は Shalmaneser III の統治期間として TIGLATH PILESER III のものを示し, 後者についての記載は省かれている。

|                          |                            |                           |
|--------------------------|----------------------------|---------------------------|
| Ashur-Ubalit (1340)      | Ashur-Nasir-Apal (885-860) | Sennacherib (705-681)     |
| Tukulti Urta I (1232)    | Shalmaneser III (746-728)  | Esarhaddon (681-668)      |
| Tiglath Pileser I (1100) | Shargon (722-705)          | Ashur-Bani-Apal (668-626) |

#### 略号

|        |  |
|--------|--|
| ABC    | Grayson, A. K. (1975) <i>Assyrian and Babylonian Chronicles</i> , Texts from Cuneiform Sources 5, Locust Valley, New York: Augustin.         |
| SAA 10 | Parpola, S. (1993) <i>Letters from Assyrian and Babylonian Scholars</i> , State Archives of Assyria 10, Helsinki: Helsinki University Press. |

#### 参照文献

- Alkhas, W. (2001) “Malfono Youhanon Qashisho (1918-2001),” *Zinda Magazine* 7/6, April 10, 参考 URL: <http://www.zindamagazine.com/html/archives/2001/an041001/> (2020年5月2日最終閲覧), Washington, D.C.: Zinda Corporation.
- Breasted, J. H. (1916) *Ancient Times: A History of the Early World*, Boston: Ginn.
- Breasted, J. H. (1919) *Survey of the Ancient World*, Boston: Ginn.
- Cohen, M. E. (1993) *The Cultic Calendars of the Ancient Near East*, Bethesda, Maryland: CDL Press.
- Eusebius Pamphili (1818) *Chronicon bipartitum, nunc primum ex Armeniaco textu in Latinum conversum, adnotationibus auctum, Graecis fragmentis exornatum*, part 1, *Historico-chronographica*, ed. by J.-B. Aucher, Venice: Coenobium Armenorum.
- Frame, G. (1992) *Babylonia 689-627 B.C.: A Political History*, Istanbul: Nederlands Historisch-Archaeologisch Instituut.
- Grayson, A. K. (1980-1983) “Königslisten und Chroniken: B. Akkadisch,” in Edzard, D. O. (Hrsg.) *Reallexikon der Assyriologie und vorderasiatischen Archäologie*, vol. 6, *Klagegesang – Libanon*, Berlin: De Gruyter, 86-135.

- Hayakawa, H., Mitsuma, Y., Ebihara, Y. and Miyake, F. (2019) “The Earliest Candidates of Auroral Observations in Assyrian Astrological Reports: Insights on Solar Activity around 660 BCE,” *The Astrophysical Journal Letters* 884:L18: 1-7, Washington, D.C.: The American Astronomical Society.
- Jäger, O. (1909) *Weltgeschichte in vier Bänden*, vol. 1, *Geschichte des Altertums*, Leipzig: Velhagen & Klasing.
- Jasrow, M., Jr. (1915) *The Civilization of Babylonia and Assyria: Its Remains, Language, History, Religion, Commerce, Law, Art, and Literature*, Philadelphia: Lippincott.
- Makko, A. (2017) “In Search of a New Home: The Assyrian Diaspora in Sweden,” in Başer, B. and Levin, P. T. (eds.) *Migration from Turkey to Sweden*, London: Tauris, 261-294.
- Milard, A. and Whiting, R. (1994) *The Eponyms of the Assyrian Empire 910–612 BC*, State Archives of Assyria Studies 2, Helsinki: The Neo-Assyrian Text Corpus Project.
- Myers, P. V. N. (1904) *Ancient History*, Boston: Ginn, revised edition.
- Novotny, J. and Jeffers, J. (2018) *The Royal Inscriptions of Ashurbanipal (668–631 BC), Aššur-etel-ilāni (630–627 BC), and Sîn-šarra-iškun (626–612 BC), Kings of Assyria*, part 1, The Royal Inscriptions of the Neo-Assyrian Period 5/1, University Park, Pennsylvania: Eisenbrauns.
- Olmstead, A. T. (1923) *History of Assyria*, New York: Scribner.
- Parpola, S. (1983) Letters from Assyrian Scholars to the Kings Esarhaddon and Assurbanipal, part 2, Commentary and Appendices, *Alter Orient und Altes Testament* 5/2, Kevelaer: Butzon & Bercker (Reprinted 2007, Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns).
- Qashisho, Y. (2006) “Vi är assyrier historiskt, geografiskt, språkligt och kulturellt,” *Hujådå: en assyrisk tidskrift*, March 17, 参考 URL: <http://www.hujada.com/article.php?ar=4&page=61> (2020年4月19日最終閲覧), Södertälje: Assyriska Riksförbundet.
- 新井通郎 (2004) 「中島敦「狐憑」の構造」『二松：大学院紀要』18: 113-137, 二松学舎大学
- 新井通郎 (2005) 「中島敦「木乃伊」の構造」『二松：大学院紀要』19: 133-152, 二松学舎大学
- 安福智行 (2001) 「中島敦「文字禍」論：その成立過程について」『京都語文』7: 192-207, 佛教大学国語国文学会
- 円城塔 (2018) 『文字禍』新潮社
- 小口裕通 (2004) 「ニネヴェ」日本オリエント学会編『古代オリエント事典』岩波書店, 650-651
- 神奈川文学振興会編 (2009) 『県立神奈川近代文学館蔵中島敦文庫直筆資料画像データベース』県立神奈川近代文学館
- 川崎康司 (2004) 「リンム」日本オリエント学会編『古代オリエント事典』岩波書店, 807
- 川村湊 (2009) 『狼疾正伝：中島敦の文学と生涯』河出書房新社

- 木村東吉（1980）「古譚」成立期考『日本文学』29/7: 67-77, 日本文学協会
- 小林登志子（2015）『文明の誕生』中央公論新社
- 佐々木充（1973）『中島 敦の文学』桜楓社
- 佐々木充（1975）「中島 敦「木乃伊」の特質について」『千葉大学教育学部研究紀要 第一部』24: 182-172, 千葉大学
- 高橋英夫・勝又浩・鷺只雄・川村湊編（2002）『中島敦全集』別巻, 筑摩書房
- 田鍋幸信（1986）「中島敦 蔵書目録」日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書: 梶井基次郎・中島 敦』有精堂, 第3版, 276-287
- 中島敦（1942a）「古譚」『文學界』9/2: 138-151, 文藝春秋社
- 中島敦（1942b）『光と風と夢』筑摩書房
- 中島敦（1976）『中島敦全集』3, 筑摩書房
- 中島敦（2001）『中島敦全集』1, 筑摩書房
- 中島敦（2002）『中島敦全集』3, 筑摩書房
- 中島敦（2003）『李陵・山月記』新潮文庫, 改版
- 日本大学法学部図書館（1980）『日本大学法学部所蔵中島敦文庫目録』日本大学法学部図書館
- 萩原朔太郎（1976）『萩原朔太郎全集』8, 筑摩書房
- 深田久彌（2002）「中島敦の作品」高橋英夫他編『中島敦全集』別巻, 筑摩書房, 181-187
- 洪瑟君（2009）「ラフカディオ・ハーンの民俗学と中島敦」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』58: 195-204, 広島大学
- 山下真史（2017）「中島敦「文字禍」の典拠詳解」『中央大學國文』60: (13)-(26), 中央大学国文学会
- 山本良（2015）「文学と教育は不倶戴天の敵：中島敦「古譚」研究への補助線」『國語と國文學』92/11: 147-158, 東京大学国語国文学会
- 渡辺和子（2004）「アッシュルバニパル」日本オリエント学会編『古代オリエント事典』岩波書店, 300